

自由応募分科会 1「内政・外交の関連性と国内知的基盤構築の新視角から見る中国の政策決定過程」・報告 1

報告テーマ

国内知的基盤構築の新視角から見る中国の外交政策決定過程

氏名(所属)

張 雲(新潟大学)

要旨

中国の外交政策・行動と国内政治のダイナミズムとの関連性(中国外交政策決定過程の国内要因)の探求は従来から現代中国研究における学術的な先端の一つである。既存研究を大まかに分類すると、以下の三つの説がある。第一として、「権力闘争論」である。この論者は中国の政策決定過程を主に共産党内の権力闘争の視角で分析している。第二として、「利益競争論」である。この説は、中国の改革開放政策により世界政治経済との相互依存によって、様々な利益集団が生まれ、彼らの利益主張の競争が政策決定に多大な影響を及ぼしているということである。第三に、「政治指導者意向論」である。この説は、中国のような中央集権型体制では政治指導者の意向が政策決定を左右する決定的な要因ということである。上記の研究は中国の内外リンケージへの理解において重要な知的作業であることは否めない。しかし、「権力」と「利益」を中心とする既存研究は実証研究の困難と相まって、多くの憶測が含まれ、解釈の信憑性の疑問が残る。企画者は、既存研究には中国の政策決定の「知」の要因が軽視されていることが上記の「知的ジレンマ」の解消の妨げの一つであると考えている。これは、中国の権威主義体制は、良い知の創造環境ができず、知の影響力が極めて限定的であるという根底的な認知に関連すると思われる。中国の知識界は政治指導者の言説の正当性を高める道具であるという認識である。しかし、筆者はエピステミック・コミュニティの理論研究と日中米関係の実証研究によって、中国の外交政策決定における知的要因、知的基盤の再構築と政策のイノベーションの関連性について初歩な見地を得た。これは従来の研究と異なる視点からの研究ポテンシャルを示唆することと理解している。本報告は中国の内外リンケージ、中国の外交政策決定の国内知的基盤の構築のメカニズム、知と政策の関連性について現段階の研究と今後の研究計画を中心に報告する。本研究は、将来的に権威主義国家における政策決定の知の重要性、知的創造と政策変更の関連性について理論開発なども期待できる。